

夏目漱石『坊っちゃん』論

——夢の意味、『野分』にある越後を関らせて——

鵜川紀子

はじめに

『坊っちゃん』における坊っちゃんと清との関係は、先行論文にて、「恋人・妻のイメージ」を思わせる間柄^{〔注1〕}をはじめ、「清が坊っちゃんの理想像として実像を超えて構築された」「夢想」となっているとするもの^{〔注2〕}、坊っちゃんの現状に清が「諦め」を見ているとするもの^{〔注3〕}などあるが、それらの中に坊っちゃんが見た清の夢に基づいた、坊っちゃんと清との関係について言及しているものは見られなかったように思う。

そこで今回は、坊っちゃんが見た清の夢から、坊っちゃんと清との新たな関係を導きたい。

一 清の夢を見た際における、坊っちゃんの状況

では、坊っちゃんが見た清の夢を考察するにあたって、まず、その

夢を見る直前に交わされた、坊っちゃんと「四国辺」〔1〕の宿屋の下女との会話を見ていきたい。

下女がどちらから御出になりましたと聞くから東京から来たと答へた。すると東京はよい所で御座いませうと云つたから当り前だと云つてやつた。膳を下げた下女が台所へ行つた時分、大きな笑ひ声が聞えた。くだらないから、すぐ寐た〔2〕

ここで坊っちゃんは、下女の「東京はよい所で御座いませう」という言葉に対し「当り前だ」と返答する。これは、四国に着いた際の坊っちゃんの態度が「野蠻な所だ」〔2〕、「人を馬鹿にしてみらあ、こんな所に我慢が出来るものか」〔2〕とあることから、坊っちゃんが四国に対し偏見を持っていると判断でき、そのため、下女の社交辞令を意図して肯定した常識外れの行為といえる。その後、下女は「大きな笑い声」を立てている。そして、坊っちゃんはその笑い声を、明確な理由も付けずに「くだらない」と評する。坊っちゃんのその言葉の意図を知るために「寐た」後に見た清の夢を見ていく。

うとくくしたら清の夢を見た。清が越後の笹船を笹ぐるみ、むし

や／＼食つて居る。笹は毒だから、よしたらよからうと云ふと、いえ此笹が御葉で御座いますと云つて旨さうに食つて居る。おれがあきれ返つて大きな口を開いてハ、ハ、と笑つたら眼が覚めた。

(二)

ここで坊っちゃん、清の「越後の笹船を笹ぐるみ、むしや／＼食つて居る」という行動に「あきれ返つて」いる。それは、清の行動が常識から外れていることを指している。そして坊っちゃんは、その「あきれ」を「大きな口を開いてハ、ハ、と笑」うことで表す。この関係は、先に見た引用の、坊っちゃんと下女との関係に重なるものである。しかしそれは、ただ今日の出来事を夢に見ているというものではない。笑う側と笑われる側とに入れ替わりが見られるのである。つまり、坊っちゃんは、夢という自分の無意識下の意識の中で、馬鹿にする側であつた下女を自分に置き換え、また、馬鹿にされる側であつた自分を清に置き換えているのである。

二 東京にいた際の坊っちゃんと清

では、なぜ坊っちゃんは馬鹿にする側の相手を、自分を笑つた下女ではなく、清としたのであろうか。この疑問を解くことを、坊っちゃんと清との関係を説明する糸口としたい。そのために、まず四国へ来る以前、東京にいた際の坊っちゃんと清との関係を整理する。坊っちゃんは自身と清とを、以下のように表している。

おれは到底人に好かれる性でないとききらめて居たから、他人から木の端のように取り扱われるのは何とも思わない、却つて此清の様になやほやしてくれるのを不審に考へた。(一)

このように、幼少時の坊っちゃんは「到底人に好かれる性でないとききらめて」いた。そのため、清がなぜ自分に愛情を傾けるのかが分からず、清を「不審」と捉えていた。しかし、清は次の態度を取る。

清は時々台所で人の居ない時に「あなたは真つ直でよい御気性だ」と賞める事が時々あつた。(二)

右記のように、清は坊っちゃんを可愛がる理由を、他の皆が嫌う坊っちゃんの「性」にこそ見出していると示していた。ところが坊っちゃんは、以下のように言う。

然しおれには清の云ふ意味が分からなかつた。好い気性なら清以外のものも、もう少し善くしてくれるだらうと思つた。清がこんな事を云ふ度におれは御世辞は嫌だと答へるのが常であつた。すると婆さんは夫だから好い御気性ですと云つては、嬉しさうにおれの顔を眺めて居る。(中略) 少々気味がわるかつた。(一)

このように、坊っちゃんはあくまで自分の性格に価値を見出さず、清の言葉を聞いても「意味が分からな」として、頭から拒絶していた。確かに、坊っちゃんは清を信じられない理由として、「好い気性なら清以外のものも、もう少し善くしてくれるだらう」と挙げている。しかし、それを「御世辞は嫌」という言葉で伝えても、清は再度坊っちゃんに「夫だから好い御気性」と価値を見出している。ところが、坊っ

ちゃんはそれを「気味がわる」と評するにいたる。このように、清に何度愛情を伝えられても、坊っちゃんはその信じられないのである。そこから、この当時の坊っちゃんは、清が自分を可愛がる事実は見えていても、その理由までは理解できないでいたと思われる。しかし、坊っちゃんの清に対する意識は、以下の変化をみせる。

清はおれを以て将来立身出世して立派なものになると思ひ込んで居た。(中略) / 夫から清はおれがうちでも持つて独立したら、一所になる気で居た。(中略) おれも何だかうちが持てる様な気がして、うん置いてやると返事丈はして置いた。所が此女は中々想像の強い女で、(中略) 勝手な計画を独りで並べて居た。(二)

ここでの坊っちゃんは、清に対し「思ひ込んで」「一所になる気」「勝手な計画」と嫌悪を見せている。しかし一方で、「うん置いてやる」と肯定する「返事」をしており、清を受け入れてもいる。嫌悪しつつも肯定しているこの態度は、先の清の愛情を「不審」で「気味がわる」いものとし、拒絶していた坊っちゃんと異なるものである。その意識の変遷の理由を知るために、以下の言葉を見る。

此下女はもと由緒のあるものだつたさうだが、瓦解のときに零落して、つい奉公送る様になつたのだと聞いて居る。(一)

この清の「もと由緒のあるもの」という過去と、坊っちゃんへの「将来立身出世して立派なものになると思ひ込んで居た」態度とを併せてみると、坊っちゃんが清の愛情を「不審」と思わなくなってきた理由が見えてくる。それは、清の愛情をまさに「勝手な計画」の一端であ

ると意味付けたためではないか。つまり坊っちゃんは、清が自分を可愛がるのは、清が「将来立身出世」した自分を利用して、再び「由緒のあるもの」に返り咲くためだと判断したのである。それにより、坊っちゃんの中で清の愛情が、理由の分からない「不審」なものから、清自身の保身という明確な利益を持った納得のできる行為に変わっていった。そのため、清を「勝手」と嫌悪しながらも、そのように打算的な清だからこそ、返って自分が「将来立身出世」する代わりに愛情をかけてもらえるという保障が見え、安心して受け入れることができただけではないか。

ところが、坊っちゃんは年を重ねるにつれ、自分を「清がなる」と云ふものだから、矢つ張り何かに成れるんだらうと思つて居た。今から考へると馬鹿々々しい(二)と悲観的に考え始めた。その上で、清への思いは、さらに変化を遂げる。

おれの来たのを見て、起き直るが早いのか、坊っちゃん何時家を御持ちなさいと聞いた。卒業さへすれば金が自然とポツケツツの中に湧いて来ると思つて居る。そんなにえらい人をつらまえて、まだ坊っちゃんと呼ぶのは愈馬鹿氣で居る。おれは単簡に当分うち持たない。田舎へ行くんだと云つた(二)

坊っちゃんは、清の「何時家を御持ちなさい」との言葉に「当分うち持たない」と答え、自分が清の期待に裏切っていることを自覚した上で、清の自分への態度を「馬鹿氣で居る」と評する。そこから、坊っちゃんが、清の期待に応えられない自分を恥じるのではなく、清

の過剰な期待を愚かしいと判断していると分かる。

以上が、東京における坊っちゃんと清との関係である。

三 坊っちゃんが清を夢に見た理由

ここまでで見てきた、東京における坊っちゃんの清への感情は、清が自分の将来を頼っているというおごりと、その清が自分の実態に気づいていないことへの軽蔑とであった。その感情は、坊っちゃんが宿屋の下女に馬鹿にされた原因である、坊っちゃんの東京生まれのおごりと田舎への蔑視とにそのまま通じるものである。そこから、坊っちゃんの下女と清とを感情の面から重ねていたと分かる。それが意味することは、坊っちゃんが自分の偏見を自覚した上で、夢でも同様の偏見を繰り返していること、即ち偏見を肯定していることである。坊っちゃんにとって、偏見は否定されるものではなく、偏見を持っている自分こそが正しく、清や下女はそのまま自分に馬鹿にされ続けるべきであると考えていたのである。だからこそ、坊っちゃんは返って、夢の中に下女をそのまま登場させるわけにはいかなかった。なぜならば、それをすると、坊っちゃんは下女に笑われた対象が自分であり、そのために夢で返返しをしたと認めることになる。それを避け、同時に自らの鬱憤を晴らすためには、坊っちゃんは下女に対しておごりと蔑視という同等の条件を抱えている別の誰かを馬鹿にする必要があったのである。それをするので、坊っちゃんは自らの中で、そのおごりと

蔑視を正しいものと認識でき、且つ返返しも果たせるのである。

ところが、坊っちゃんはその正しいはずの夢から覚めてしまう。そして見たものが「下女が雨戸を明けてゐる」(二)姿である。つまり坊っちゃんは、下女によって夢から覚めさせられているのであり、またしても、下女によって自分の正しさを肯定する邪魔をされているといえる。しかも、その直後、「夕べの下女」(二)は「やにや」笑つて「(二)と変わらず「失敬」(二)な態度を取る。これにより、坊っちゃんは、自分が依然として馬鹿にされている事実を強く確信したといえる。そこで坊っちゃんは、馬鹿にされている現在の状態を何とかしようと、「茶代をやつて驚かしてやらう」(二)と考える。そして、金のあることを誇示した結果、坊っちゃんはそれまで「靴は磨いてなかつた」(二)というような、あからさまに冷遇された状態から、次のように打って変わって優遇される。

帳場に坐つて居たかみさんが、おれの顔を見ると急に飛び出して来て御帰り……と板の間へ頭をつけた。靴を脱いで上がると、御座敷があきましたからと下女が二階へ案内をした。十五畳の表二階で大きな床の間がついて居る。おれは生れてからまだこんな立派な坐敷へ這入つた事はない。(中略)坐敷の真中へ大の字に寐て見た。い、心持ちである。(二)

ここに見られるように、坊っちゃんは宿屋の状況に満足した結果、前夜は馬鹿にして笑っていた清に対し、以下の感情を持つようになった。それは、坊っちゃんの清への感情を分析する上で注目し値する。

昼飯を食つてから早速清へ手紙を書いてやつた。おれは文章がまづい上に字を知らないから手紙をかくのが大嫌だ。又やる所もない。然し清は心配して居るだろう。難船して死にやしないか扨と思つちや困るから、奮発して長いのを書いてやつた。(一)

このように、昨夜は全く気にも留めていなかつた清の「心配」を思いやり、大嫌いな手紙でも「奮発して」書く気持ちになつてゐる。これは、自分を馬鹿にしていた下女を屈服させたことにより、昨夜の鬱憤が晴れ、清に対する八つ当たりが消えたためと考えられる。それを証明するかのうちに、この後坊っちゃん以下の態度を取ることも、分析の上で重要である。

手紙をかうして仕舞つたら、い、心持ちになつて眠気がさしたから、最前の様に坐敷の真中へのびくと大の字に寐た。今度は夢も何も見ないでぐつすり寐た。(二)

この「手紙をかうして仕舞つたら、い、心持ち」からは、清を思いやる自分に対する自己満足が察せられる。ここで坊っちゃんは昨夜の清への八つ当たりを清算してゐるのである。仮に昨晚見た清の夢が、一般的に考えられるような、初めての地の寂しさや離れた清への恋しさから見た夢ならば、昨夜よりも、清の「心配」を思いやり手紙を書いたこの時こそ夢を見そうである。ところが、坊っちゃんは夢を見ず、それどころか、「今度は夢も何も見ないでぐつすり寐た」(前注以下、傍注は全篇川口よ)と、さも清々したと言わんばかりである。とても前夜の夢を好意的に捉えているとは思いがたい。坊っちゃんにとって、前夜の夢は

恋しいどころか見たくないものであり、夢を見ない眠りこそが、「ぐつすり」とした望むべき眠りなのである。それは、清の夢が坊っちゃんにとって不快であつたことを明確に示しているといえる。

以上から、清の夢は、坊っちゃんの田舎への偏見と、それを非と認めることのできない弱さから出た自己保身に基づく、八つ当たりの感情で見たものと分かる。

四 夢の中での清の行動の原因

これまでより、坊っちゃんが清の夢を見た理由は明らかとなつた。ではなぜ、その夢の内容は、清が越後の笹館を食べることであつたのか。それを説明することで、新たな解釈を見出せると思われるため、以下の起因と思われる場面から考察を始めていきたい。

「何か見やげを買つて来てやらう、何が欲しい」と聞いて見たら「越後の笹館が食べたい」と云つた。越後の笹館なんて聞いた事も無い。第一角が違ふ。「おれの行く田舎には笹館はなさ、うだ」と云つて聞かしたら「そんなら、どつちの見当です」と聞き返した。「西の方だよ」と云ふと「箱根のさきですか手前ですか」と問ふ。随分持てあました。(一)

これは、坊っちゃんが田舎へ行く三日前に交わされた清との会話である。この会話の直前、坊っちゃんは清に「当分うちは持たない。田舎へ行く」(一)と告げ、清を「非常に失望した容子」(一)にさせてい

る。そして、そんな清を「余り気の毒」「二」と感じ、「慰め」「二」始める。そこから、坊っちゃんはこの「見やげ」の会話をするのである。よって、ここでの坊っちゃんは、なんとかして清を元氣付けようとしていると思われる。その通りに、坊っちゃんは、はじめは清の機嫌をうかがい、優しく「何が欲しい」と尋ねている。が、その態度は持続しない。坊っちゃんは、最後には清を「随分持てあまし」している。この変化によって示される意味を明らかにしていきたい。

まず坊っちゃんは、「越後の笹船が食べたい」との清の言葉を聞き、「越後の笹船なんて聞いた事もない」と感じる。そして、その疑問をなげか、肝心の「聞いた事もない」「笹船」に向けてのではなく、「笹船」を売っている「越後」に向け、「第一角が違ふ」と思っている。それを「おれの行く田舎には笹船はなさ、うだ」という言葉にのせて伝えるとき、清はその土地性が曖昧である答えに対し、「そんなら、どつちの見当です」と尋ね返す。この問いには（行く田舎を聞いて見合った土産を頼もう）という目的が見える。ところが坊っちゃんは、「西の方だ、よ」とさらに曖昧な答えを繰り返す。これでは、清は答えようがない。なぜならば、行く田舎が分からなければ、先の「越後の笹船」のように、再び見当違いの答えをしてしまい、坊っちゃんを困らせてしまうからである。それゆえ、清は「箱根のさきですか手前ですか」と更に場所を問いかけた。話はいつの間にか、土産より田舎の場所にすりかわってきている。ところが、坊っちゃんにとってみれば、清は自分の将来に頼っている存在である。そのような清に、「地図で見ると海浜で

針の先ほど小さく見え」「二」「碌な所ではあるまい」「二」と予想される田舎に行く事実を告げると、ますます清を「失望」させるであろうため、清の問いには答えられない。だが、清を「慰め」る以上、その問いを無下にもできない。つまり坊っちゃんは、清の問いに答えることができず、かといって、清を叱り付けることもできずにいると考えられる。それゆえ、清を「随分持てあました」のである。そしてその困惑の思いが、肝心の土産の話をしないうちに会話をやめてしまうという結果へ坊っちゃんを導いていくのである。

以上から分かることは、この会話が結局のところ、坊っちゃんの行く四国とは全く関わりを見せずに終わっていることである。それはもちろん、坊っちゃんが清に行く田舎を四国と告げないために起こった事態ではあるが、それにしても、四国に行くことを告げるために始まった会話にしては不自然ではないであろうか。

それを考えるために、ここでこの場面を、作者漱石の視点から分析してみたい。そもそもこの会話の発端が「何か見やげを買つて来てやらう」であることは、土産という具体的な品物から、坊っちゃんが行く四国の印象を強める目的であるかと予測させ得る。ところが、問われた清が唐突に「越後の笹船」と答えたことで、その印象は一気に四国から遠ざかる。だが、仮に漱石がこの場面 で本当に四国を表したかったのであれば、見当違いである「越後の笹船」はすぐに打ち消され、四国に相応しい土産を出すのが適当に思われる。ところがそうはならず、坊っちゃんは清を「持てあま」すあまり、他の土産を出さないこ

とはおろか、行く田舎である四国の印象さえ、言葉を濁しごまかし続け、故意に消し去ってしまった。それゆえ、この場面の印象は唯一出てきた、見当違いの「越後の笹船」に落ち着いてしまったのである。

この不自然なまでの結果から考えると、漱石が本来この会話で示したかった言葉は、四国ではなく、「越後の笹船」に他ならないと思われる。また、この会話は、坊っちゃんや四国へ出立する直前の場面でもある。つまり、実際の場面にて、漱石があえて「越後の笹船」をキーワードとして示していることは看過できない。

五 越後と『野分』

では、その「越後の笹船」とは何かというと、「葉の広く大きい越後特有の笹にくるんで、その移り香を賞味する船。」^(註4)である。坊っちゃんはその船を「聞いた事もない。」と知らない様子を見せるが、清が「越後の笹船」と産地を示したため、それがどの土産なのかは分かった。だからこそ、「おれの行く田舎には笹船はなさ、うだ」と判断でき、土産から坊っちゃんに行く田舎の場所へと会話が逸れるきっかけの言葉を発したのである。そこから考えるに、この「越後の笹船」は、土産の内容としての「笹船」が重要なのではなく、あくまでその産地が「越後」であることに意味があるのではないか。

その「越後」が描かれた漱石の作品といえは、『野分』である。『野分』の主人公、白井道也は元中学教師であり、初めて赴任した地は越

後であった。そこではある石油会社が絶大な力を持っており、人々には金銭が全てであるという考えが蔓延っていた。道也はそれに反発を示し、演説会にて金力と品性とは必ずしも一致しないと述べた。その結果、町全体を敵に回し、越後を去った。このような『野分』において、「越後」は黄白方能主義そのものという意味付けられよう。

もちろん、『坊っちゃん』と『野分』とでは、初出年月は『坊っちゃん』の方が先をいく^(註5)。しかし、その執筆時期は一年も開いていない。つまり、漱石が『野分』にて書き表した越後へのイメージが、『坊っちゃん』執筆時において、全く作用していなかったとは言いがたいのではないか。それは、明治三九年の漱石の手帳から窺える。

神を恐る、癖に人を恐れず。／今の世の豪商とか金満家と云ふものは常に恐れつ、ある。何を恐れつ、あるかと云へば金を失ふ事と権力を失ふ事を恐れつ、ある。／金は何の為に失ふか。権力は何の為に失ふか。彼等をして金と権力を失はしむるものは何であるか。——人である。金や力を失うのを恐れて人を恐れぬのは、濡れる事を恐れて、雨を恐れぬ盲人である。^(註6)

金や権力にのみ固執し、人に大事を置かない人間を非難する記述である。これは、先の『野分』内の「越後」の黄白方能主義と重なる。そして、この手帳の記述より一つ前に書かれたと思われる記述には『坊っちゃん』に用いられた言葉が見られ、この記述より二つ後に書かれたと思われる記述には『野分』に用いられた言葉が見られる。そこから分かることは、限りなく両作品執筆時期に近い時点で、漱石が金力

とそれがもたらす権力とについて憤りを感じ、それらが人間に良い影響を与えないと捉えていた事実である。そして漱石は、その金力と権力への憤りの思いを『野分』において「越後」の地に託した。だが、ここで疑問が出てくる。なぜ漱石は、金力と権力とに固執する人間が蔓延る地として「越後」を選んだのか。それを解くために、注目すべき人物を取り上げる。それは新潟出身で漱石の大学同窓生である坂牧善辰である。

六 坂牧と漱石における暴力への考え方

坂牧は漱石の書簡にて、以下のように登場する。

小生は其後毎日弓術を強勉致居候（中略）小屋坂牧吉田長谷川斉藤西谷等皆々執心に候^{（註7）}

このように、坂牧は漱石と弓術仲間として付き合いがあったと分かる。坂牧は、地元である新潟の『三条市歴史民俗産業資料館』^{（註8）}にて、以下のように記述されている。

「白井道也は文学者である」で始まる夏目漱石の『野分』。この「白井道也」のモデルであると言われているのが、古志郡山古志村出身で、三条中学校二代目校長を務めた坂牧善辰です。（中略）名校長として名高い人物です。（中略）東京大学の予備門（中略）に入学します。（中略）坂牧は特に漱石と親しかったようです。／初めて校長として赴任した長岡中学で、素行の悪い成金の子弟た

ちに、先輩にあたる学生が制裁を加えるという事件が起こりました。当時、特に素行の悪い生徒に対する先輩からの制裁は黙認されていたため、金持ちのこどもと貧乏なこどもを区別しなかった坂牧善辰は親たちに対して謝罪しませんでした。そのため親達による校長排斥運動が起こり、長岡中学校を去ることになりました。／『野分』の冒頭は、この事件をもとに書かれたと言われています。

ここでは、坂牧は道也のモデルとされており、『野分』にて語られている「越後」の黄白万能主義は、坂牧の元で起こった一連の事件^{（註9）}がもとであるといっている。これが真実であるのかを知るために、以下より、あえて、『野分』ではなく、『坊っちゃん』における暴力の描写から、漱石と坂牧の暴力に対する対応の比較をしていきたい。それにより、『野分』だけでなく、『坊っちゃん』における「越後」の取り扱いが判然とすると考えるためである。

山嵐は拳骨を食はした。赤シヤツはよろ／＼したが「是は乱暴だ、狼藉である。理非を弁じないで腕力に訴へるのは無法だ」／「無法で沢山だ」とまたばかりと撲ぐる。「貴様の様な好物はなぐらなかつちや、答へないんだ」とぼか／＼なぐる。（中略）「貴様等は好物だから、こうやつて天誅を加へるんだ。これに懲りて以来つ、しむがい、いくら言葉巧みに弁解が立つても正義は許さんぞ」と山嵐が云つた（中略）／「おれは逃げも隠れもせん。（中略）用があるなら巡査なりなんなり、よこせ」と山嵐が云ふから、

おれも「おれも逃げも隠れもしないぞ。(中略)警察へ訴へたければ、勝手に訴へろ」と云つて、二人してすたくあるき出した。

〔十一〕

ここでまず、比較のために、坂牧の事件と右の引用とを、人物の立場別に整理してみる。始めに、暴力を振るつた人間は(先輩にあたる学生)と(坊っちゃんと山嵐)とである。次に、暴力を受けた人間は(素行の悪い成金の子弟)と(赤シャツと野だ)とである。最後にそれを統括する人間としているのが、校長である(坂牧)と作者である(漱石)とである。では、分析に入る。

引用にあるように、坊っちゃんと山嵐とは、赤シャツの「腕力に訴へるのは無法」という言葉に対し、「無法で沢山」と答えている。自分たちの行動を「天誅」といい、「正義」としながらも、同時にそれが見方を変えると「無法」とも分かっていたのである。だからこそ、山嵐はその責任を果たすために「逃げも隠れも」しないから「調査」をよこせと言ひ、坊っちゃんも同意したのである。そもそも、坊っちゃんは「いたづらと罰はつきもんだ。罰があるからいたづらも心持ちよく出来る」(四)という信念を持っている。つまり、坊っちゃんは自分の行動に対し、どういう意図で行つたにせよ、悪と判断できる行動なら、きちんと罰を受け入れ、反省すべきだという責任感を持っていたのである。むしろ、その責任感があるからこそ、「心持ちよく」自分の思想の赴くままに行動できると思つていた。そこから考えるに、坊っちゃんと山嵐とは、暴力をそのまま「正義」として捉えていたのではなく、

自分の信念を伝える手段として捉えていたのである。そしてそのための罰なら受け入れる覚悟があつたのである。

その考えを坊っちゃんに持たせていた漱石が、坂牧の行つた、生徒の暴力に対する「黙認」行為を「名校長」と捉えるであろうか。とはいえ、確かに「坊っちゃん」でも、坊っちゃんと山嵐との鉄建制裁は、「下女に調査は来ないかと聞いたら参りませんと答へた。赤シャツも野だも訴へなかつたなあ」と二人は大きに笑つた(十一)と「黙認」された。「腕力に訴へるのは無法」と暴力を悪とした赤シャツが警察に通報しなかつたこの行為は一見、紛れもなく坂牧の行つた「黙認」と同等と考えられ、「罰があるからいたづらも心持ちよく出来る」という坊っちゃんの考えと矛盾するかに捉えられる。だが、これは、作者漱石が坊っちゃんと山嵐との暴力を「黙認」したというよりも、赤シャツが坊っちゃんと山嵐との暴力を「黙認」したことを漱石が描いた、といえる。そして前者と後者とは、意味が大きく異なるのである。

そもそも、坊っちゃんは暴力を「正義」そのものではなく、それを示す手段と考えていた。そして、それを貫くためならば、「警察へ訴へたければ、勝手に訴へろ」と言ひ、「調査は来ないか」と尋ねるほど覚悟を決めていた。その姿勢からは、自身の行動の正しさの確信と、赤シャツの「奸物」ぶりへの憤りが見てとれる。それは、赤シャツにも感じられたのであろう。だからこそ、赤シャツは警察に通報しなかつたのである。なぜならば、罰を受ける覚悟で行動した坊っちゃんには、もはや恐れるものは何もないが、「奸物」である赤シャツには恐れるも

のがあつたと考えられるためである。つまり、罰を恐れぬ坊っちゃん
が警察に行けば、なんら隠すことなく、自分たちが罪である暴力を犯
すまでに至つた全ての経緯、つまり、赤シャツの「奸物」ぶりを告白
するであろう。そうならば、実際に罪に問われるかどうかはともかく、
赤シャツの「奸物」ぶりは、確実に他者に伝わることになる。なにし
る赤シャツは、坊っちゃんに「奸物」ぶりの決定的瞬間を見られ、追
い詰められたときですら、「証拠がありますか」「十二」と言い逃れを
試み、自らの罪を認める覚悟など毛頭ないことを示した。その赤シャ
ツにとつては、自分たちの「腕力に訴へるのは無法」という正論など
捨ててもなんら惜しいものではなく、むしろ、坊っちゃんの暴力を
「黙認」し、自分たちの「奸物」ぶりを坊っちゃん以外から隠す方がよ
ほど大切であつたのである。そこから、赤シャツが坊っちゃんを警察
に訴えれば、自身も不利になると判断したことが分かり、その時点で
赤シャツが自分の罪を自分の中でだけは認め、坊っちゃんの行動を一
つの「正義」の要素もあるとして受け入れた結果に他ならない。であ
るからこそ、坊っちゃんと山嵐とは、警察が来ていないとわかり、「大
きに笑」うほど嬉しがつたのである。なぜなら、「罰があるからいたづ
らも心持ちよく出来る」と思っている坊っちゃんたちが、単に罰を逃
れて喜ぶはずがない。坊っちゃんと山嵐とは、赤シャツと野だどが警
察を呼ばないという形で、坊っちゃんの「正義」を「正義」と受け入
れたと分かつたからこそ喜んだのである。

よつて、『坊っちゃん』での暴力の「黙認」は、被害者である赤シャ

ツ自身が、暴力を振るわれた自分が悪であつたと認め、暴力を「正義」
として受け入れた結果に過ぎない。第三者が、坊っちゃんと山嵐とを許
したわけではないのである。よつて、坂牧の「素行の悪い生徒に対す
る先輩からの制裁は黙認されていた」ため、「謝罪」を行わなかつたとい
う行為は、漱石に「名校長」と受け止められたとは判断しがたい。
なぜなら、『坊っちゃん』に準えて考えるならば、中学校で「素行の悪
い生徒に対する先輩からの制裁は黙認されていた」理由は、その「素
行の悪い生徒」自身が、「制裁」を受け入れていたために成立していた
事柄であり、第三者である校長がそれを「黙認」する理由はどこにも
ないからである。むしろ、以上に見てきた漱石の考え方に基づくなら
ば、校長という第三者は、生徒に正しく暴力の二面性を理解させ、自
分の思想と行動とに対し、責任感を持つよう導く必要があつたのでは
ないか。

七 坂牧の思想

ここで、そもそも坂牧が本当に道也のモデルであるといえるのかど
うかを知るために、坂牧が自身の教育方針について記した「訓育上の
基本思想」^(註10)を見ていきたい。これはあくまで坂牧の人物像を明ら
かにすることに目的があり、著された年代より、漱石が坂牧の文章を
読めないことは承知の上での分析である。

眞の自由は籠の中のカナリヤの自由である。即ち人間といふ一種

のカナリヤが、法律と道徳、國家と社會といふ籠の中に於て享有する自由が眞の尊き自由である。(中略) 此の籠を破れば一寸大自由を得られるかの様に見えるが、實は大不自由な修羅の巷に出るのである。／ 差別なき平等は悪平等(偽平等)であり、平等なき差別は悪差別(偽差別)である。精神界にも物質界にも凡て平等と差別の両面があるから一面のみを見て、他を忘れる様なことがあれば忽ち自他共に其の害毒を蒙るのである。(中略) 然るに平等を唯一無二の眞理と想つて、妄りに階級打破を叫んで社會の秩序を亂すものは、病的思想の持主であるが、其の反對に階級を不變的なものと思つて倨傲暴慢、下に向つては妄りに壓迫を加へるもの、又卑屈怯懦にして上に對しては一切御無理御尤もと屈從するが如き者は、是亦病的思想の持主である。然らば如何にして此の両面の調和を計つて之を自己の實行上に現すべきか。此處が修養すべき最も大切な點である。即ち「腹に平等を持ちて表に差別を行ふこと。」之が此の両面の調和を實現するべき唯一の道である

と私は信ずるのである。

ここで坂牧は「眞の自由は籠の中のカナリヤの自由」と考え、「人間といふ一種のカナリヤが、法律と道徳、國家と社會といふ籠の中に於て享有する自由が眞の尊き自由」としていた。にもかかわらず、坂牧が暴力という「法律と道徳」にも「國家と社會」にも明らかに悪と教えられてゐる行為を「黙認」したことは、一定のルールの中の自由こそ眞の自由という自らの思想にも反してゐる。また「素行の悪い生徒

に對する先輩からの制裁は黙認」という行為は、先述したように、暴力がそれを行った坊っちゃんの中でさえ、一面において「警察」を待つ覚悟が必要であるほど悪である以上、一步間違えば、坂牧が「病的思想」として挙げていた「下に向つては妄りに壓迫を加へるもの」が「素行の悪い生徒に對する先輩からの制裁」になるであらうし、それを「黙認」する行為は「卑屈怯懦にして上に對しては一切御無理御尤もと屈從すること」にならなかねない。このように、坂牧の暴力への「黙認」行為は、「坊っちゃん」における漱石の考え方はもちろん、坂牧自らの教育理念においても矛盾を見せていたのである。

また、そもその教育理念においても、漱石と坂牧の間に、理解が通じているとは思えない。漱石は、坊っちゃんに「警察」を覚悟させた上で暴力を振るさせた。既にこれが、一定のルールの中の自由という坂牧の思想と矛盾することは明らかである。また、平等という思想においても、「妄りに階級打破を叫んで社會の秩序を亂す」ことなく、かといつて「妄りに壓迫を加へ」たり「卑屈」になつたりすることもよくない、正しいのは「腹に平等を持ちて表に差別を行ふこと」であるという思想は、まさに事勿れ主義以外の何物でもなく、坊っちゃんにおける以下の言葉に矛盾する。

学校には宿直があつて、職員が代る／＼之をつとめる。但し狸と赤シャツは例外である。何で此兩人が當然の義務を免かれるのかと聞いて見たら、奏任待遇だからと云ふ。(中略) 夫で宿直を逃がれるなんて不公平があるものか。(四)

君とおれは（中略）一所に喧嘩をとめに這入つたんぢやないか。

辞表を出せといふなら公平に両方へ出せと云ふがい、（中略）堀

田には出せ、私には出さないで好、と云う法がありますか（十二）

このように、坊っちゃんは平等という点において執拗なこだわりを見せる。自身の不利になる宿直における特権階級との差別だけではなく、自身の利益になる辞職勧告の免れにおいても、差があるという事実に対し憤りを見せている。そもそも坊っちゃんが幼少時清を受け入れきれなかった理由の一つにも、次のような不平等が挙げられていた。

清が物を呉れる時には必ずおやぢも兄も居ない時に限る。おれは何が嫌だと云つて人に隠れて自分丈得をする程嫌な事はない。兄とは無論仲がよくないけれども、兄に隠して清から菓子や色鉛筆を貰ひたくはない。（中略）是は不公平である。（一）

坊っちゃんにこの思想を持たせていた漱石が、「腹に平等を持ちて表に差別を行ふ」姿勢をよしと見るはずがない。それはむしろ、坊っちゃんが食つて掛っている赤シャツ側の意見である。

以上から、前掲した三条市の記述が示しているような、坂牧が『野分』の主人公、道也のモデルであるとしている論は認めがたいと考えられる。それでは、坂牧と、『野分』における「越後」の地に金力と権力に関するイメージには、まるで関係がないのであろうか。

その疑問を解決するために、漱石の坂牧に対する書簡を見てみたい。

拜啓残暑の候愈御清適奉賀候其後は存じながらも、いつも御無沙汰御海恕可被下候今般は転任御希望のよしにて履歴書御送費意正

に了承任り候其うち聞き込み次第御報可仕候小生は存外交友少なく校長杯を周旋するには至極不適任に候^{（註）}

このように、漱石は坂牧に対し依頼を断る対応を見せている。その点においても、漱石と坂牧が親しいとする三条市の記述は疑問が生じるが、ここで着目したい点はそこではない。右記の傍点を付加した部分、「其後は存じながらも」である。以上の論で示したように、漱石が坂牧をモデルに『野分』を書いたとは言えないであろう。そもそも、漱石が坂牧の起こした事件を、承知していたかどうかも明らかではなかった。ところが、ここで「其後は存じながらも」と漱石が書簡に書いている以上、漱石が、坂牧の「其後」を知っていたことだけは事実である。もちろん、ここでいう「其後」が本当に坂牧の校長排斥運動のことを指しているかどうか、確定はできない。だが、漱石と坂牧とがの東京帝大の同窓生である以上、少なくとも卒業後の進路であることに間違いはなく、「今般は転任御希望のよしにて履歴書御送費意正に了承任り候」と、坂牧の転任希望の意志を特に問いただすこともなく受け入れていることから、漱石が坂牧からの書簡を受け取る以前から、坂牧が「越後」で中学校長をしており、今回転任を願ひ出る必要がある理由、つまり、「素行の悪い成金」に関する事件から起こった校長排斥運動を知っていた可能性は高いように思われる。ここから、坂牧が道也のモデルであるかないかはともかく、漱石が坂牧の起こした事件を知っていた可能性だけは、大いに強いということが分かり、そこから、漱石が「越後」の地に、歪んだ偏見を持つに足る内容を得ていた

と言える。そしてそれが、手帳にあったような、金力と権力とが人間性を荒廃させるという思想に重なって『野分』にて成立したのではないか。

八 「越後の笹飴」を清が食べる意味

以上から、漱石が、道也のモデルとは言えないものの、坂牧という人物に根柢を置いて「越後」の地に金力と権力とに対する嫌悪の思いを託していたことは分かった。では、その金力と権力とに対する嫌悪の象徴「越後の笹飴」を清が坊っちゃんに對し、四国へ行く直前、キーワードとして示した意味とは何であるのか。

坊っちゃんは四国での教師生活で、赤シャツら「奸物」と出会う。赤シャツは、うらなりの許嫁であるマドンナを、うらなりの「暮し向きが思はしく」〔七〕ない隙に、「学士」〔七〕という地位を持って奪おうとした人物である。それはまさに、「越後」に象徴されている金力と権力とによって荒廃した黄白万能主義そのものといえる。そして、その赤シャツこそが、坊っちゃんの四国での生活を困難にさせた張本人である。つまり、清が土産話で出した見当違いの「越後の笹飴」は、その実、四国で起こる坊っちゃんの騒動を暗示していたのである。

そして、清は坊っちゃんが四国へ来て一夜めに見た夢の中で、その「越後の笹飴」を「笹ぐるみ、むしやくく食つて居る」のである。この「越後の笹飴」が前述したように、「葉の広く大きい越後特有の笹にく

るんで、その移り香を賞味する飴」である以上、あくまで「越後」は、その「笹」に象徴されている。つまり、清は最も「越後」である状態で笹飴を食しているのである。坊っちゃんはそれを見て、「笹は毒だからよしたらよからう」と言う。「笹」つまり「越後」が「毒」だということ、坊っちゃんの言葉からは、「越後」に託された金力と権力とへの嫌悪、つまり金力と権力とに基づく四国での困難が見てとれる。ところが清は、坊っちゃんの忠告に對し、「此笹が御葉で御座います」と答え、「旨そうに食」い続ける。坊っちゃんにとっては「毒」ではない四国での困難な生活を、清は「葉」だと言って食っている状態、すなわち、これは我が身を持って坊っちゃんを「毒」である四国での困難な生活から守ろうとしている清の姿勢が見てとれるものである。たとえ「毒」であろうと、坊っちゃんを守ることになるのであったら、それは清にとつて「葉」も同然なのである。清は、四国での赤シャツによる騒動の暗示である「越後」の笹を食らいつくすことによって、坊っちゃんの目の前から四国での困難を消し去ろうとしているのである。それは即ち、「坊っちゃん」の結末である、坊っちゃんが四国での生活を終え、東京で待つ清の元へ帰るといふ場面に通じるものではないか。

以上から、坊っちゃんが四国へ行く直前に、清によって示された「越後」のキーワードは、坊っちゃんが四国で赤シャツによって金力と権力とに關係した困難な事件に遭うことへの暗示と分かった。そしてその「越後」を、四国へ来て初めての夜、夢の中で清が食べつくし、坊っちゃんの目の前から消したということ、それは、坊っちゃんにと

って、清こそが四国の騒動を消し去り、坊っちゃんを救い出してくれる人物であるということを示している。そしてそれこそが、坊っちゃんが四国から清の待つ東京へ帰るといふ『坊っちゃん』の結末へと繋がっていくのである。

おわりに

以上の考察より、坊っちゃんが四国に来て見た清の夢には、坊っちゃんにおいては、坊っちゃんの自分の非を認めることのできない自己保身を象徴したものであり、清においては坊っちゃんを守り、その帰りを待つ意味が示されていたといえる。

注1 平岡敏夫『坊っちゃん』試論——小日向の養源寺——」（『文学』 岩波書店 一九七一年一月）

2 北川扶生子『坊っちゃん』における清の意味——〈片破れ〉という関係——」（『国文学研究ノート』第二八号 神戸大学「研究ノート」の会 一九九四年三月）

3 石原千秋『坊っちゃん』の山の手」（『文学』 岩波書店 一九八六年八月）

4 『漱石全集』第二卷 岩波書店 一九六六年一月 注解より

5 『坊っちゃん』は「ホトトギス」にて、一九〇六年四月に初出。

『野分』も同じく「ホトトギス」にて、一九〇七年一月に初出。

6 『漱石全集』第一九卷 岩波書店 一九九五年一月

7 『漱石全集』第二二卷 岩波書店 一九九六年三月（二八九四年五月三十一日 菊池謙二郎氏宛）

8 『三条市歴史民俗産業資料館』（新潟県三条市本町三の一の四）
<http://www.city.sanjo.niigata.jp/~rekinm/> 「三条と近代文学」より。

9 一九〇六年二月に起こった騒動である。

10 『長岡中學讀本 人物篇』 新潟県立長岡高等学校同窓会
 一九七六年十月 復刊発行（初出）『和同會雑誌』第七八号 一九三一年）

11 『漱石全集』第二二卷 岩波書店 一九九六年三月（一九〇六年八月十五日 坂牧善辰氏宛）

テキストは、『漱石全集』一九九三年二月～一九九六年二月 岩波書店による。

（うがわ のりこ／平成一七年度博士前期課程修了）